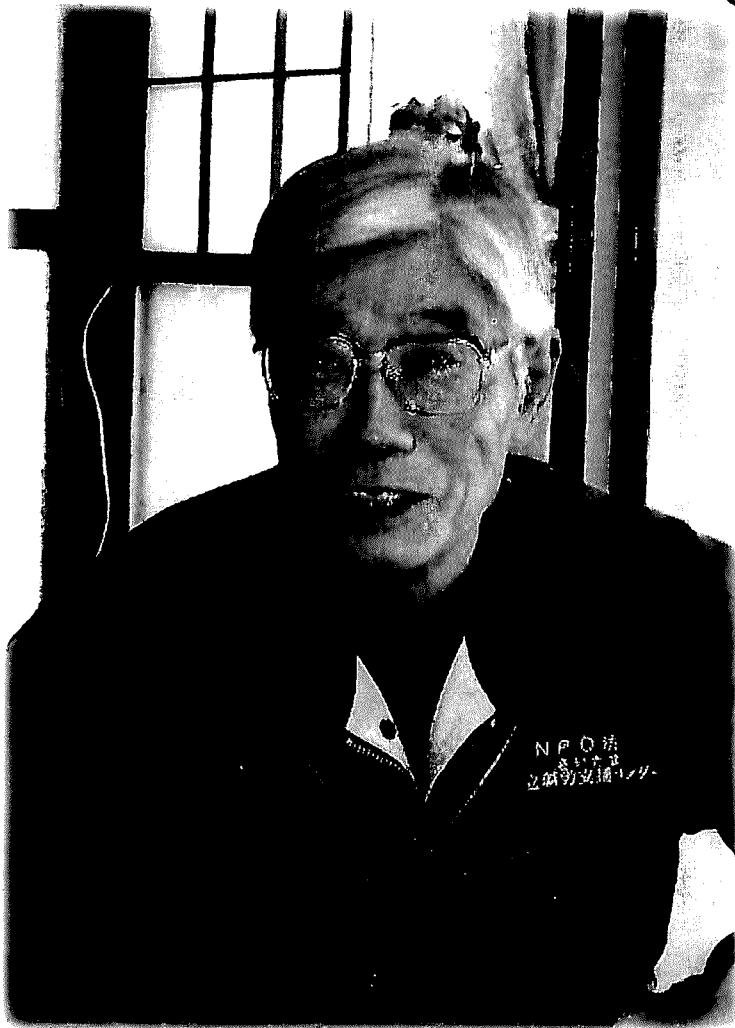


さいたまここに人あり



NPO 法人さいたま自立就労支援センター 代表理事

菅田 紀克さん

NPO 法人さいたま自立就労支援センターの菅田紀克さんは、農業を通じて就労と生活の場をつくるホームレス支援活動を行っています。その取り組みは、高齢化を背景に県内に広がりつつある耕作放棄地の再生につながる、新しい地域づくりのモデルとしても注目を集めています。約十年にわたる歩みを振り返り、これからの夢についても語っていただきました。

「ホームレスによる農業」から広がる
ユニークな地域づくりの輪

「腹いっぱいメシを食いたい」が原点

活動のそもそものきっかけは、15年ほど前の出会いにさかのぼります。当時、住まいがあるさいたま市大宮区を歩いていると、芝川という小さな川沿いに、ぼつりぼつりとホームレスの姿を見かけるようになってきました。次第にその数が増えてくるにつれ、地域の住民から、「怖い」「汚い」「臭い」と、彼らを排除しようという声があがるようになっていきました。しかし、私にはそんなふうには考えることができませんでした。

というのも、かつて企業経営者として、苦い経験をしたことがあったからです。私がいたのは、電子デバイスや関連装置を扱う、熾烈なグローバル競争の世界。浮き沈みの過程で、泣く泣く従業員のリストラをせざるをえなかったり、会社をつぶして周囲に迷惑をかけたことなどもありました。人生で出会ったいろいろな人たちのこと、また自分自身のことを思い返すと、厳しい境遇に置かれ希望を失っているように見える路上生活者が、どうしても他人と思えなかった。見て見

ぬふりができなかったんです。

私は少しずつ、川原で暮らすホームレスたちと向き合い、言葉をかわずようになっていきました。会話の中で彼らから出てきたのは、「人間、腹が減ってはしょうもないよね」「野宿の仲間と、自分たちの力で、腹いっぱいメシを食いたい」という声でした。

そこで私は考えました。幸い、さいたま市には見沼田んぼなどの農地がある。ここで自給自足をする活動ができないか。つてをたどり訪ね歩いてみたところ、「今は荒れはてた休耕地になっているけれど、それでも構わないなら農地を貸してもいいよ」という地主さん数人に巡り



荒廃した休耕地を耕す

目を輝かせ働くホームレスの仲間たち

あうことができました。

二〇〇四年二月、こうして私たちは、理解ある協力者の力を借りつつ、農業を通じて自立を目指すNPO法人を立ち上げたのです。

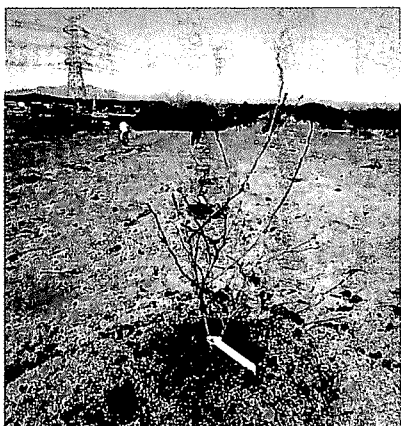
化させた時期でもありました。

私たちが幸運だったのは、法人の設立当初からこうした行政当局・担当者との信頼・協力関係を築けたことでした。県

この時期は、国が「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」を定め、埼玉でも県社会福祉課を中心に行政がホームレスの自立に向けた支援施策を本格

からホームレス実態調査事業を受託したり、路上生活者を対象にした「総合相談会」の場で炊き出し係を担当させていただいたりしたことは、財政的にも、地域の福祉関係者とのネットワークを築く上でも、とてもありがたいことでした。私自身も、東京でホームレス支援に長く携わってきた団体に学ぶなどして、少しずつ活動の基盤を整えていきました。

とはいえ、肝心の農作業は苦勞の連続でした。田んぼや畑の仕事は未経験者ばかり。お金も道具も何もない中で、まずは鎌を買ってきて、荒地地の葎や下草を刈るところからはじめました。皆、一日の仕事が終わるとへとへとでした。なんとか参加者にお弁当ぐらいは出さなければ



ブルーベリーの苗木

ばと、アルバイトをして資金をひねりだしたこともありました。率直に言って、「ホームレスが集まって農業をしている」ことに対する、世間の冷たい偏見の目を感じることもしばしばでした。しかし、それでも活動を続けてこられたのは、辛さを吹き飛ばす感動があったからです。一番うれしかったのは、何と言っても、

ホームレスの仲間たちが実にまじめに、いきいきと、目を輝かせて仕事に取り組む様子を目の当たりにしたことでした。考えてみれば当然なのですが、もともとそれぞれが職業を持って社会で活躍していた人ばかり。チャンスさえあれば、一生懸命働く人たちなのです。

そんな頑張りを見たある地主さんが、所有しているマンションの一棟を法人に貸して下さることになり、メンバーたちがシェアする住居が確保できたのも、本当にうれしいことでした。

共同募金会などからの資金援助で本格的

求められ、感謝されるやりがい

こうして活動が定着し、認知度が高まるにつれ、行政、福祉関係者らのネット



ブルーベリーを摘む

な農機具も揃えられるようになり、二〇一〇年ごろには20人ほどの仲間が自給自足できるだけの米や野菜を収穫できるようになりました。「ホームレスの仲間が、自分たちの力で、腹いっぱいメシを食べるようになる」という第一段階の目標は、ひとまず達成できたわけです。

ワークから、「この人も農業を通じた自立をサポートしてもらえないか」といつ

た形で紹介を受ける機会が増え、新たなメンバーが増えてきました。

そこで、「本格的に腰を据えた農業者として、次の展開を探ろう」との県の農林部に相談に行ったことが、私たちの次の大きな転機になりました。

率直に状況をお話ししてみたところ、農林部の担当者はすぐに農業参入団体としての登録手続きをしてくれ、農林振興センターや各市町村の農業委員会、地権者との借地仲介を行ってくださる農林公社等、農業経営のキーパーソンに次々と引きあわせてくれました。

実は埼玉県内の多くの自治体、地域が、後継者不在のため急速に広がる耕作放棄



ソバ畑

地の問題に悩んでいたのです。そこに、私たちが新たに農業をやりたいと手を挙げたものだから、渡りに船と歓迎してくださったというわけです。以来、活動の領域は大きく広がり、今日に至っています。

たとえば加須市では、空き家になっていた古民家をメンバーの住居としてお借りし、周辺の田んぼで米をつくるほか、名産品であるイチジクの栽培に取り組んでいます。このイチジクは、地元の和菓子屋さんのご指導のもとジャムに加工しています。その工程では、地域の障害者の就労支援活動も行っています。

また美里町では、二千本のブルーベリー大農園をつくることをめざして、栽培計画をスタートさせています。いま、資金づくりのために、苗の「里親さん」を広く募集しています。将来は都市部から観光客を呼べる名所にしていきたいと考えています。

このように、さまざまな地域、より多くの人たちとつながり、モデル農園をつくる事業に踏み出したことで、メンバーの意識も変化してきました。「まずは自分が見えるようになる」ことを目指していたところに比べ、「周囲に求められ、役



元桑畑の下草刈り

に立って、喜ばれる」仕事をしている実感がやりがいとなり、ますます意欲に燃え、いきいきしてきたように感じます。

路上生活者の中には、かつて土木現場で活躍していた等、手に職がある人が少なくありません。こうした人たちにとつて、重機を操って木を伐採したり、土地の開墾、整理を行ったり、適材適所に人員を配置し、段取りを整えて手際よく「現場仕事」を進めることは、得意中の得意の作業なわけです。それを地域の農家のおじいちゃんおばあちゃんら、みんなから感心され、感謝されることが、生きる誇りを取り戻すきっかけになっています。

地域で共生・共助の絆を紡ぎたい

今、私たちが力を入れて取り組んでいる構想がもう一つあります。それは、本庄市の中山間地・本泉地区に、農業と観光をコンセプトの核に据えた「元氣村」をつくるプロジェクトです。

これまで本庄市では、大根をつくって漬物加工業者に販売したり、そばを栽培して粉を地元の名店に卸したりと、特色あるビジネスモデルで実績を積み重ねながら地元の方々の信頼関係を深めてきました。そうした関係者との対話の中で、高齢化・過疎化に悩む山あいの集落があるという話題が出てきました。

しかしよく話を聞き、実際に現地へ足を運んでみると、野には美しい桜やカタクリが咲きほこり、小川ぞいにはホタルが飛び交う、本当に美しい里なのです。まずは私たちがこの地域に入り、安全・安心の農作物づくりを進めながら休耕地の整備などを行い、将来的には、観光農園や週末菜園のような形で都会の皆さんが気軽に土と触れ合える癒しの場として、ユニークな町おこしにつなげていき

たいと考えています。

この「元氣村」計画には、すでに企業からの助成金がつき、廃校を利用した音楽会など文化イベントの計画が進むなど、現在進行形で夢が膨らんでいます。農業に軸足を置いたホームレス支援から出発した私たちの活動は、その原点を大切にしつつ、多くの人的ご助力を得て次第に共生・共助の地域づくりという側



田植えのとき



ジャムづくり講習会

面を持つものになってきました。「元氣村」も、たとえばひきこもりの若者や厳しい社会情勢の中で心の病を抱えざるを得なくなった人などが、しばらくゆったりとした時間を過ごしながら、次の人生のステップに進む準備が出来る場所にしていけたらと構想しています。

私たち自身が、いろいろな使い方をしていただけ、幅広い可能性を秘めた社会資源になれるよう、これからも地道に活動を続け、連帯の絆を紡いでいきたいと考えています。